

マリスを用いた。実験材料は、各々の肉眼的に健康な下顎臼歯部頬側歯肉を用いて歯肉内縁上皮下の毛細血管網構築を観察した。方法は動物に腹腔内麻酔を行い、灌流固定後、片顎を一塊として脱灰し、通法に従って、パラフィン切片を作製、一般染色を施し、組織構造を検索した。一方、血管系の観察には、墨汁注入透明標本、および、三次元的な血管網構築の検索として、メタクリレート系合成樹脂(Mercox:大日本インキ製造)の注入鋳型標本を作製し、走査型電子顕微鏡を用いて観察した。

皮付着の幅が広く、上皮付着直下の重層扁平上皮内に乳頭が存在し、その中には毛細血管のループが数列、歯牙を取り囲むように存在する。しかしながら、ゴールデンハムスターは重層扁平上皮は厚いが、上皮付着の幅は狭く、歯牙を取り囲む上皮付着直下の毛細血管ループは、マウス、ラット、シマリスに比較して背が低く、しかも一列であった。これらのことから、ゴールデンハムスターの歯肉が外来刺激に対して反応性が高いのは、上皮付着の幅、および上皮付着直下の毛細血管ループの数の少なさが関係しているものと思われる。

演題9 過疎地域住民の保健医療行動——北海道紋別郡白滝村を事例として

○尾野 守

北海道上川郡剣淵町立歯科診療所

はじめに：昭和56年末現在、北海道には無医村2ヶ所、無歯科医村15ヶ所あり、無医・無歯科医地区まで含めるとさらにその数を増してくる。白滝村は北海道北部山間部に位置し、総人口が1900人に満たない無歯科医村である。今回、白滝村住民の健康生活に関するアンケート調査の結果が得られたので報告する。

方法：北海道紋別郡白滝村住民を対象に系統抽出法に基づき1/6サンプル抽出し、「医療について」「歯科医療について」「無歯科医村について」の3区分からなる調査表を用いて個別訪問面接聴取法を実施した。期間は昭和55年10月から昭和56年2月。回収率50.7%。

結果：1)白滝村住民の日常医療圏は通院可能距離である40km 範囲内の遠軽町にあり、眼科や耳鼻咽喉科などの専門治療を含む広域医療圏は旭川市にあるといえる。しかし、この範囲もこの地域では季節変動するのが特徴的である。2)歯科への受診は7~8月が最も多く、「仕事が暇になった」「こどもが夏休みで治療に行くからついでに」等の受診動機を挙げている。この傾向は一般的農村パターンと比較してみると逆現象を呈して

いるようである。また、歯科医院の選択理由には「家に近く交通費が安い」「保険がきく」などを挙げており、白滝村住民にとって歯科治療を受けることは医療費にせよ交通費にせよかなりの経済的プレッシャーがかかっていることが理解できる。

3)無歯科医村であることについての住民の関心は二分されている。「卒後教育の一環として数年間の避地歯科医療の義務化」等々の積極的意見と、逆に「さわぐだけ損」「今後歯医者にはかからぬ」等あきらめからひらきなおりに出る意見とがあり、問題の深刻さを露呈している。

まとめ：白滝村の人口減少は住民の日常生活からさらに健康生活の基盤さえも不安定な状況へと追い込んでいる。「量が増えれば過密から過疎へ流れる」というこれまでの発想には限界があることが、「昭和56年医師・歯科医師・薬剤師調査報告」から読みとれる。北海道過疎地域の医療圏は不完全度を増しながら取縮し続けているのが現状である。こうした過疎地域に対しては「過疎医療公団」のようなものを設立し、自由開業医制とは別枠の方式をとっていくことも考えられよう。

演題10 Sjögren 症候群における唾液腺の特異所見について

○武田泰典

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

Sjögren 症候群(以下SjS)の主病変の座の一つである唾液腺には著明なリンパ性細胞浸潤、導管上皮の増生といわゆる筋上皮島の形成、硝子様物質の出現等が特異的にみられる。しかしながら、これらの所見が如何なる病状を反映しているかは未だ明らかではない。今回演者はSjS 確実例より生検された小唾液腺のうち、高度の変化のみられた2症例を用い、浸潤リンパ球と導管上皮の関連、硝子様物質の本態について検討を加えた。

電顕的に導管上皮間には種々の程度のリンパ球浸潤がみられた。この導管上皮層へのリンパ球浸潤は介在部導管に最も顕著に認められた。このことは介在部導管上皮を標的としてリンパ球浸潤がおこるものと考えられ、抗唾液腺導管抗体等の特異抗体との関連より興味ある所見と考えられた。

硝子様物質は主として筋上皮島内外ならびに導管周囲にみられ、蛍光抗体間接法では一部でIgG, IgM, C_{1q}, C₃が陽性であった。さらに電顕的には微細点状あるいは線状の集簇として認められた。これらの結果より、硝子様物質はSLEにおける腎系球体基底膜沈着物に類似性